

隨泉寺寺報

平成23年(2011年)3月号 第487号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

春季彼岸会法座

講師 法泉寺住職 川上順之師

講題 『いわれを聞く』

■彼岸会法要 ～【彼岸と此岸】～

「彼岸(ひがん)」は「彼(か)の岸」。つまり西方浄土、覚りの世界を表します。それに対して「此岸(しがん)」は「此(こ)の岸」。私たちの暮らしている娑婆(しゃば/苦しみの)世界を表しているのです。私たちの先達は、太陽が真西に沈む時期に、西方浄土・彼岸と苦しみの娑婆・此岸をつなぐことを願っていたんです。私たちは何故生まれてきて、何を願い生きているのでしょうか。このことがはっきりしないと、本当の意味で苦からの解放はありません。彼岸に墓参りをするのは、私に先立って浄土往生を遂げられた故人を偲びつつ、私自身が浄土往生の道を確認するためなんです。

今回の御講師は一昨年ご出講いただいた『川上順之』先生です。まだお若い先生ですが、非常に好評でぜひともまたお願いしてくださいというご要望にお答えして、再度ご出講いただきます。わかりやすいお話ですから、お参りください。

3月の法座予定

- 3月13日……………掃除 鴨の巣団地
- 3月14日昼席午後1時より……………春季彼岸会法座
- 3月14日昼席終了後15時半より…京都旅行打ち合わせ
- 3月14日夜席午後7時より……………出張法座 鴨の巣
- 3月15日朝席午前10時より……………春季彼岸会法座 おとき
- 3月15日昼席午後1時より……………春季彼岸会法座
- 3月15日昼席終了後15時半より…仏婦役員会
- 4月 2日午後1時より……………作品づくり
- 4月 2日午後6時より……………門信徒会本部役員会

☆ 瀬野川仏婦連合会50周年記念法座

仏婦講座の最後の1席を瀬野川仏婦連合会発会50周年記念法座として開催しました。上瀬野龍善寺・下瀬野浄行寺・畑賀品秀寺からも60人以上の参加者があり、隨泉寺もなんと120名近くの方のお参りして下さり、本堂がいっぱいになりました。仏婦大会が開催されていた時も沢山お参りして下さいましたが、一座の法座としては、私が知っている限り、一番多くの方が参って下さいました。何しろ本堂の下陣だけでは座りきれなくて、内陣にも座って聴聞していただきました。住職としてこんなにうれしいことはありません。しかし昔の仏婦大会の真を見ると、本堂に入りきれなくて、掛け座をしておられるのがありますので、当時は沢山の方がお参りくださったのでしょう。

ところで昔 仏婦大会で模擬仏前結婚式というのを執り行っておられます。なかなか白い企画で、笑い声が聞こえてくるようです。その当時に本願寺でも、仏前結婚式を推奨されていたようです。

戦後すぐに結婚して、この中野にこられた人の話を、何人かに聞かせていただきました。その当時は今のような結婚式ではなくて、お仏壇に参って、それから仲人さんから三々九度の杯をしてもらったそうです。ある人は、ちょうどその頃は、隨泉寺の古いおばあちゃんが、寺を守っておられたので、おばあちゃんにお勤めをもらったという人もおられました。そうですね。昔はそこのおうちの仏様の前で行われるのが普通だったようです。



☆親鸞聖人750回大遠忌法要御参拝旅行の打ち合わせ・説明会開催について

3月14日昼席終了後(午後3:30)旅行の打ち合わせをいたします。おかみそり(帰敬式)を授式される方、大谷本廟に納骨されるか等をお聞きします。ご希望の方はあらかじめ申し出てください。またバスに酔われるとか、食事で薬を飲まれるとか注意事項があれば申し出てください。

☆仏婦役員会開催について

4月15日昼席終了後(午後3:30)仏婦役員会を開催します。今年度の決算や来年度の行事予定や予算を審議していただきます。

☆御礼

永代経懇志 金 拾萬円 所利信殿 故 所 フキエ様 特 永代経志として
永代経懇志 金 拾萬円 川本信義殿 故 川本 ヨシノ様 特 永代経志として

☆御礼

門信徒会へ 金 一封 所利信殿 故 所 フキエ様 香典返しとして
門信徒会へ 金 一封 川本信義殿 故 川本 ヨシノ様 香典返しとして

3月「きばり心」を抜いたとたん あんな快い 安らぎの世界に変わる

私が、若い頃読みふけた懐かしい書物の中の一冊に、出隆先生の『哲学以前』があります。出隆先生は、哲学者であられるとともに、「神伝流」の水泳の達人でもあられたと聞いています。

その出隆先生が、何かに「水泳」のことをお書きになっていました。「水は、人間を浮かせるだけの浮力をもっている。しかるに、人間が溺れるというのは、心の重みで溺れるのである。だから、溺れた人というのは、『こんな所で……』と思われるほど、浅い所で溺れている。結局、水の浮力に足をとられてあわててしまい、その心の重みで溺れたのである。心を無にして、身も心も水に預ければ、自分の力を使わなくてもおのずから浮かぶ」というような内容の文章でした。



出隆先生の、「心を無にして、身も心も水の浮力に預ければ、おのずから浮かぶ」というお言葉は、親鸞聖人が「如来の本願力に乗托すれば、おのずから然からしむる自然法爾の世界を恵まれる」とお教えくださっていることにも倣っているように思います。またそれは、私が子どもの日、あの熱くて熱くてたまらなかつたお灸の熱さが、「きばり心」を抜いたとたん、あんな快い安らぎの世界に変わったことにも、つながっている気がするのです。

私は、初め、お灸の熱さに負けまいとする「きばり心」の重みで、熱さの底に沈み、熱さの苦しみに溺れていたのです。それが「きばり心」を捨てたとたん、熱さが苦にならない世界に浮かせてもらったのです。

どなたのお作か存じませんが、「散るときが浮かぶときなり蓮の花」という句が思い出されます。「自分が……」という「我」が散ったとき、ポッカリ、安らぎの世界に浮かばせてもらうのです。水に「浮力」があるように、私に注がれている「本願力」が、沈むしかない私を、浮かせてくださるのです。

散歩中、村の牛飼いさんに「ご苦労さんです」と挨拶しましたら、「はい、飼料は高いし、牛の値は安いし、土曜・日曜どころか、盆も正月もありません。よい事は何もありません」と、嘆きの言葉が返って来ました。

そのことを思い出しながら、またの牛飼いさんに「ご苦労さんです」と申しましたら、「はい、おかげさんで、きょうも、牛どんに養うてもろとりますわい」という言葉が返ってきました。その方が、後光を放っておられるようでした。同じ牛飼いさんでも、生きておられる世界は同じではないと、教えられました。

★生きてきたように死んでいく

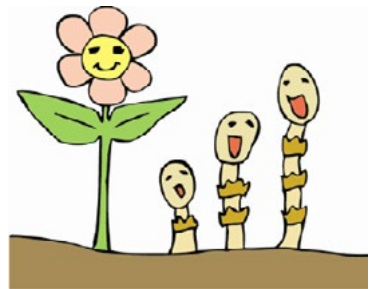
最近、89歳の方がぼっくりとなくなりました。お風呂に入られていて、いかにも長いからといって家族の方が様子を見に行かれたら、湯船の中でなくなっていたそうです。前の日まで元気で畑にも出ておられたのに、青天の霹靂というか、びっくり仰天です。家族の人は大変でしたが、近所の方は口々に「うらやましい、出来ればあんなふうに参加してもらいたい」とか、「あの人は良い人だったからあんなに安らかに死ねた」
「認知症だけにはなりたくない、長い間の病気にもなりたくない、出来ればぼっくり死にたい」と話されていました。

いい生き方をすればぼっくり死ねて、悪い生き方をすれば、長患いや認知症になる。そうでしょうか？ぼっくり死のいい死に方で、長患いや、認知症は悪い死に方なのでしょうか？

死の縁無、縁によれば癌にもなります。縁によれば寝たきりにもなります。縁によれば認知症にもなります。死に方を選ぶわけにはまいりません。

昔 比叡山の僧侶は死に方が大問題でした。源信様の『往生要集』に【臨終行儀】ということが書いてあります。死時に仏様の来迎があるかどうか、喜びの念仏が出るかどうかは往生成仏の大問題でした。お坊さんですから家族がいません。だから25人ぐらいでグループを作り、4人チームで看取ります。一人は食事や清掃など、一人は身体介護、一人は法を説く人、ひとりは記録する人です。

無事仏様の来迎があつてお救いにあずかると【臨終業成】といいます。まさしくお浄土に生まれて仏様に成ることが確定するのです。



これに対して親鸞聖人は死に方は問題ではない、平生のうちにお念仏を喜んでいと平生のうちに仏様に成ることは決定していますよとお示し下さいました。これを【平生業成】といいます。『ご消息』に【真実信心の行人は、撰取不捨のゆゑに正定聚の所に住す。このゆゑに臨終待つことなし、来迎たのむことなし。信心の定まるとき往生また定まるなり。来迎の儀則を待たず。】とあります。

人間生きてきたように死んでいきます。いつも愚痴や人の悪口やうそばかり言っていた人は、死時も悪口や愚痴やうそを言いながら死んでいきます。いつも「ありがとう、ありがとう」といっていた人は【ありがとう】といいながら死んでいきます。「なんまんだぶつ、なんまんだぶつ」といつもお念仏を称えていた人は、お念仏を称えながら死んでいきます。またお念仏が出なくても、苦しくて、のた打ち回って死んでも心配ありません。平生のうちに元気な時に解決しているからです。死に間に急に、いいひとには成れません。普段称えていない念仏は出ません。まさしく平生業成です。まさしく生きてきたように死んでいきます。